

二〇二二年度
学校推薦型選抜
適性検査II

一 問題文を読んで次の問一～問九に答えなさい。解答はすべて楷書で所定の解答用紙に記入しなさい。

AIをめぐる狂騒、遺伝子テクノロジーをめぐる狂騒といった、喧伝けんでんされてきた「外なる自然の征服」^(注1)と「内なる自然の征服」のプロジェクトは、新技術によって「より便利で安全で快適な暮らし」が可能になることを夢見させつつ、私たちの懐いだいてきた人間の定義をグラグラと揺るがせるがゆえに、漠然とした不安の感情を行き渡らせてきたように思われます。

私の考えでは、新型コロナによる危機が吹き飛ばしたのは、こうした「人間の開発した技術は世界の謎を解明し尽くして、思うがままに」**A**を改変することができる」といった観念ではなかったでしょうか。⁽¹⁾感染症に対する人類の知識が限られていることには、驚きをキンじ得ません。新型コロナ危機に促されて、私も専門家が書いた本を読むなど感染症に関するにわか勉強を少々してみました。そこですぐにわかったことは、「感染症というものはよくわからないものだ」ということでした。

人類が意図的な努力によって撲滅できた感染症は天然痘ただ一つにすぎず、ペスト、エイズ、結核、エボラ等々の多様な感染症の問題は、画期的な薬やワクチンの開発によってその被害を食い止めることができるようになったものも多いとはいえ、根本的には何ら解決されていないのです。気が遠くなるほどの長いサイゲツ(c)にわたって、多くの優れた知性が時に自らの命を危険にさらしながら感染症の脅威と戦い、その正体を見極めようと努力を重ねてきたにもかかわらずいまだにわからないことだらけで、ある感染症の流行が収束した理由もよくわからないものがほとんどなのです。例えば、約100年前に起こったインフルエンザのパンデミック、いわゆるスペイン風邪(1918～1920年)は、全世界で1700万人から5000万人もの命を奪ったと見られますが、これが収まったのも集団免疫のカクトク(d)によってであろうということまではわかっていますが、なぜそのタイミングで、どのようにして収束したのか、またウイルスの起源も、いまだわかっていません。

そして、今回の新型コロナウイルスの登場です。いま世界中の専門家がこのウイルスの研究に取り組んでいます。一筋縄で

はいきません。なにせウイルスは次々と変異し、強毒化することもあれば、弱毒化することもあります。ですから、対処として何が正解であるのかも一概には言えません。ロックダウンのために、欧米ではGDPが30%以上も下落しました。日本のGDPも30%近い下落をマークしました。それほどまでに私たちは活動を縮小させて新型コロナウイルスに打ち克とうとしてきたわけですが、このやり方が正しかったのかどうかもよくわかりません。仮に新型コロナウイルスの致死率がそれほど上がらないならば、経済縮小のために自殺に追い込まれる人の方が多くなってしまいかもしれません。もしもそうならば、活動の縮小などしない方が正解だったということになります（現にスウェーデンはそのような判断を下して実行しています）。ですが、私たちは、あまりにもわからないことが多すぎて、「仮に」とか「もしも」とかいったかたちでしか考えられないのです。また、致死率を予測することもできないならば、ロックダウンがもたらす経済的苦境による自殺者の数も予測困難です。いわんや、それらを比較することなどできるはずがありません。後遺症の重症度や発生率もまだわかっていません。安全なワクチンができるかどうかも、まだわかりません。本当にわからないこと尽くしです。

こうした現実は、「私たちは自然を征服した」という「ポスト・ヒューマン」の観念を吹き飛ばすに十分なものではないでしょうか。AIが人間の思考を無用のものとする日を想像するよりも、ウイルスの変異メカニズムや、新型コロナウイルスをきわめて危険な感染症としている理由であるところの人間の免疫系の過剰反応（サイトカインストーム）の発生メカニズムを解明することの方が、はるかに重大な課題であることは言うまでもないでしょう。

もっと言えば、新型コロナウイルスによる危機が訪れる前、私たちはなぜ、「科学技術による自然の征服」という²⁾にとり憑かれ³⁾ていたのか、立ち止まって考えてみるべきではないでしょうか。私たちはいま、常識に引き戻されたのです。

技術の発展は社会の在り方をどんどん変えてゆく、すなわち社会の在り方はその社会の持つ技術によって決定される、という考え方は「技術決定論」と呼ばれます。新聞記事などでよく見かける「AIの進化によって社会は激変する！」といった考えは、

C

技術決定論です。技術決定論は、技術を独立変数として設定し、社会の在り方をその関数としてとらえます。そして、

技術は進化し続けるものと想定されます。ですから、「ポスト・ヒューマン」の観念も技術決定論の一種、そのかなり極端なヴァージョンであると言えるでしょう。技術は進化し続けて、人間に成り代わって世界の中心になると言うのですから。

しかし、この考え方は真実ではありません。なぜなら、社会はその時々々に利用可能な技術をすべて利用するわけではないからです。例えば、日本の江戸時代には、正確に時を刻むことのできる時計がすでにありました。しかしそれは広く使われることなく、好事家こうずかの珍しい玩具として流通しただけでした。なぜなら、江戸時代の人々は、正確な時間を知る必要のある生活を送っていないからです。工業社会化しない限り、分単位の正確な時間を知ることなど全く必要ではないのです。

つまり、利用可能な技術のうち、どの技術が用いられ、どの技術が用いられないかを決めているのは、その社会の在り方なのです。このことは、技術の発展にも当てはまります。どんな技術が盛んに発展し、どんな技術が発展しないのかを決めているのは、技術そのものではなくて、その技術を利用する社会の在り方なのです。技術決定論の主張とは逆に、社会の在り方が独立変数であり、技術はその関数なのです。

もちろん、技術が社会の在り方に影響することは多々ありますが、それはその社会の中にすでに存在していたもの、すでに存在している傾向に **D**、ということにすぎません。身近な例を挙げるなら、SNSは衆愚制を生み出すのではなくて、衆愚制を活気づけ拡大するのです。

技術と社会のこうした関係が転倒して、技術が社会の在り方を決定しているように見えるのは、まさに社会が現実をそのように見せるような在り方をしているからです。そしてそれは、資本主義社会に特有の現象であると考えられます。というのは、資本主義社会では生産力を絶えず向上させることが至上命令になっているからです。「もう十分」とか「ほどほどにしておこう」といった常識に基づく判断は、資本主義社会では通用しません。生産力・生産性を際限なく上げ続けなければならないメカニズムが、ビルトインされているからです。

ですから、より高度な生産性の実現を求めて、技術革新もここでは際限のないものとなり、それがもたらす社会の変化も間断

なきものとなります。しかし、こうして技術革新が社会の在り方を変え続けているように見えるけれども、本当のところは、そうした絶えざる革新を求めているのはその社会の在り方の根本（すなわち、資本主義社会であるという社会の在り方）なのですから、その根本が際限なく強化され続けているだけのことなのです。⁽³⁾ あらゆるものが変化しているように見えて実は何も変わってはいません。

このように考えてみると、「ポスト・ヒューマン」⁽⁴⁾なる観念が、資本主義の過剰なまでの高度化の産物だということとは明らかであるように思われます。端的に言って、それは人間とその社会を技術に隷属^(e)させる非常識な考え方であり、その非常識を現代人の逃れられない宿命として押しつけてくるのです。

〔白井聡「技術と社会」内田樹編『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある〕

〔注1〕「外なる自然の征服」と「内なる自然の征服」——「外なる自然」とは自分の思う通りにならない他者としての自然のことで、「内なる自然」とは自然としての人間のことをいっている。

〔注2〕現にスウェーデンは——2020年11月時点のこと。

〔注3〕安全なワクチンが——2020年11月時点のこと。

〔注4〕独立変数——関数 $y=f(x)$ の、変数 x のこと。 x は独立して変化し、 y は x の変化に関連して変化する。

問一 傍線部(a)・(c)・(d)の片仮名を漢字にしなさい。

- (a) キン
- (c) サイゲツ
- (d) カクトク

(配点6点)

問二 傍線部(b)・(e)の漢字を平仮名にしなさい。

- (b) 撲滅
- (e) 隸属

(配点4点)

問三 空欄 A に入る最も適当な言葉を、本文中から二字で抜き出しなさい。

(配点3点)

問四 空欄

B

C

D

号を記入しなさい。

に入る最も適当な言葉を、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選び、その番

(配点6点)

B

- ① 仮説
- ② 真実
- ③ 妄想
- ④ 指標
- ⑤ 不安

C

- ① 消極的な
- ② 主観的な
- ③ 不用意な
- ④ 不規則な
- ⑤ 典型的な

D

- ① 土台を作り安定させる
- ② 希望を持たせ向上させる
- ③ 目標を示し誘導する
- ④ 疑問を呈し改善する
- ⑤ 刺激を与え増幅させる

問五

傍線部(1)「感染症に対する人類の知識が限られている」とあるが、具体的にどのような状態か。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。(配点5点)

- ① 意図的に努力を重ねればいずれ根本的な解決ができると想定されており、現在は長い期間にわたって研究を重ねている途上である。
- ② メカニズムを把握し撲滅できた感染症が複数ある一方で、長い時間をかけてもその脅威の程度が理解できていないものがある。
- ③ 長い研究によって感染症の被害を抑制する方法をある程度生み出しているもの、根本的には何も克服できていない。
- ④ 長い間その脅威から身を守る手段を生み出す努力はしているが、その起源や収束の原因を探ることには目を向けていない。
- ⑤ 感染症の脅威については把握できているものの、感染症の定義や感染症について何が解明できていないのかすら認識できていない。

問六

傍線部②「常識」とあるが、ここでの「常識」の内容について筆者はどう説明しているか、最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。
(配点5点)

- ① 科学技術の発展のためには、まず目の前で起きている課題を社会や人間の力によって解決する必要があること。
- ② 科学技術を生み出す人間の能力を必要とする社会では、科学技術が自然の力に勝ることが可能であること。
- ③ 社会の在り方が科学技術に左右されているだけであり、自然に対して科学技術の力は無力に等しいこと。
- ④ 科学技術は万能ではなく、どの科学技術を利用・発展させるかを決めるのは社会の在り方だということ。
- ⑤ 人類に危機的な状況が訪れた場合には、科学技術の発展よりも社会の在り方を守ることが大切であること。

問七

傍線部③「あらゆるものが変化しているように見えて実は何も変わってはいません」とあるが、筆者はここでのどのようなことを述べようとしているか、六〇字以内で説明しなさい(句読点を含む)。
(配点10点)

問八 傍線部(4)『ポスト・ヒューマン』なる観念』に対する筆者の考えとして正しくないものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。(配点5点)

- ① 資本主義社会のいきすぎた高度化の象徴ともいえる考え方だが、人間と社会が技術に従うという考え方は冷静に考えると非常識ですらある。
- ② 人間の定義を揺るがせるような考え方であるにもかかわらず、現代人にとっては必然であるとされ、強引に押しつけられてきた。
- ③ 新型コロナウイルスの危機によって、高度な技術よりも自然が社会の在り方を決定づけることがわかり、無意味な観念となった。
- ④ 高度な技術が便利で安全な生活を約束するという考え方であったが、新型コロナウイルスの危機で、それは真実ではないとわかった。
- ⑤ 進化し続けた技術が人間にとって代わり世界の中心になるという極端な技術決定論の一種だが、その考え方は現実にそぐわない。

問九 本文の内容と一致するものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① 技術が社会の在り方を変化させることはあるが、基本的に「技術決定論」は幻想にすぎず、発展する技術を選別するのは社会である。
- ② 「技術決定論」においては、技術には一切の変化がなく、社会の在り方のみが技術に作用されて変化する存在であるとされている。
- ③ 資本主義社会においては、社会の在り方によって利用される技術が決定されるといういびつで逆説的な関係が強化されている。
- ④ 新型コロナウイルスに対してわからないことが多いという現実、社会によりいっそう科学技術の進化を求めさせることになる。
- ⑤ 新型コロナウイルスによる危機は、資本主義社会において人間の開発した技術が誤った方向に進化していたことを証明している。

二 問題文を読んで次の問一～問九に答えなさい。解答はすべて楷書で所定の解答用紙に記入しなさい。

私たちの日常性を考えようとするとき、ツールとしてのケータイやスマホをはずすことはできないだろう。すでにケータイは消滅しつつあり、スマホが主流だ。このツールは極めて便利であり、私たちの日常生活世界をヒヤク的・超越的に拡張させてしまった。

A 大学のゼミで学生に文献を示そうとして、文献の名前は思いだせるが、著者名が記憶のあなたに飛んでいってしまったということがよくある。そのとき、学生はスマホの画面を指で数回なで、あたかも魔法のように文献を探しあて「先生、これでしょう」と教えてくれる。また学生たちの話だと、スマホは就職活動のヒツスのアイテムのようだし、訪問先の会社への最短のアクセスを調べるのに、スマホは欠かせないとゼミ生は語る。

他方でスマホの利用マナーが問題視され、スマホに集中して駅のホームから転落しないよう、また、他の乗客の迷惑にならないように過剰な使用は控えようという趣旨のアナウンスが電車内や駅で流されている。

B 、社会に迷惑のからまないようなスマホの使い方を考えることは重要だろう。ただ、私がここで考えたいのは、この至便のツールの出現によって、私たちの現実構築のありようにどのような変容が生じているのか、また、その変容の影響下での他者との出会いやつながりのあり方について、何をいま一度考え直すべきなのだろうか、という問題である。

^(c) 私たちは、スマホというツールを使いこなしながら、どのような現実を生きているのだろうか。参考になる優れた分析がある。

キエイの社会学者である鈴木謙介は「ウェブ社会」の特徴を論じる著書のなかで、「現実空間の多孔化」というユニークな分析を提示している（鈴木謙介『ウェブ社会のゆくえ——〈多孔化〉した現実のなかで』NHKブックス、二〇一三年）。

現実空間の多孔化とはどんなことを言うのだろうか。

鈴木は「現実の空間に付随する意味の空間に無数の穴が開き、他の場所から意味||情報が流入したり、逆に情報が流出したりする」ことを「空間的現実の多孔化」と呼び、「多孔化した現実空間においては、同じ空間に存在している人どうしが互いに別の意味へと接続されるため物理的空間の特権性が失われる」ことを「空間的現実の非特権化」と呼んでいる（鈴木、二〇一三、一三七頁^{ページ}）。

通勤電車の乗客の姿を例に考えてみよう。

私は毎日同じ時間の電車に乗り、大学へ出勤する。電車を待つて並んでいる乗客を見ると、その八割近くがスマホを見つめ、なにやら画面を操作している。他の乗客の様子を見たりする人はまずいない。

電車が到着する。彼らは一瞬スマホから目を離し、電車から降りる客の隙間をぬって、車内にすべりこんでいく。彼らは車内に入り、自らの場所を決めた瞬間、再びスマホを見つめはじめ。混んだ車内で、自分のすぐ隣にどんな人間が立っているのかもほとんど気にすることなく、身体を密着させ、**C** 絶妙に距離をとりながら、スマホを見つめ続けるのである。

物理的な身体、客観的な状況を考えれば、彼らは駅で電車を待つている。しかしスマホを使いこなすことで「電車を待つ」という現実にも多くの孔^{あな}があき、そこから別の多様な現実が流れこみ、彼らはその情報をもとに、自分がいま生きている現実の意味を書きかえてしまうのだ。

友人にメールをし、届いたメールを確認する、LINEを使って仲間と情報を交換する、好きなテーマでツイートする、お気に入りのソーシャルゲームを再開する、各種のサイトで最新の情報を確認する、等々。

⁽²⁾ 彼らは意味を書きかえた瞬間、その世界で生きている。ただ彼らの身体というアンテナがどこかで働いており、「電車が到着します」のアナウンスとともに、乗客という現実⁽¹⁾に瞬時に立ち戻り、急いで車内に乗りこんでいく。車内での場所決めが済んだ瞬間、彼らはスマホを見つめ、新たな別の現実の情報⁽²⁾を入手する。目的の駅までの時間、スマホから提供される多様な情報で自らの現在の意味を忙しく書きかえながら、満員電車の車内で「生きている」のである。

通勤のために電車を待ち、満員電車で揺られるという物理的・身体的なりアリティは、「通勤する」という行為」を実践している私たちにとって、いまやもつとも意味が満ちた至上の現実ではない。スマホを介して得た情報によって、私たちが多様に生きているウェブ上のリアリティと等価なのである。

かつて多くの研究者や批評家は、リアルとヴァーチャルという二分法的な考えで、ネット上の現実に幽閉されていく人びとのリアリティを解読し、批判してきた。

しかし、鈴木的主張が適切であれば、リアルとヴァーチャルという区別は「ほとんど意味がない」ことになる。私たちが、自らの身体や、身体から派生する多様な意味を投錨とうびょうさせる物理的な現実とは、他のどの現実よりも、私たちの志向が優先される至上の意味領域ではなくってしまふからだ。

生身の身体、生身の感情がつくりあげる物理的な空間での現実とは、ネット上、ウェブ上で構築される多様な現実と基本的に等価であり、私たちはスマホというツールを駆使することを通して、こうした多様な現実を瞬時のうちに移動し、体験しつつ、現在という時間を生きていることになるのだ。

こうした日常性の変化は、社会の情報化が一気に進化した結果、出現しているのであり、私たちには思いもよらない、テッテイ(4)してラディカルなものであるはずだ。

しかし私たちの日常では、脅威でもなくラディカルでもなく、タンタン(e)として変わらないように見える「あたりまえ」の連続のシーンのなかで、スマホの効用、スマホがある日常がおもしろおかしく語られている——白い犬が伝統的なおやじ語りやしぐさをする、おとぼけ家族の情景や物語というスマホのテレビコマーシャルが象徴するように——。

現象学的社会学の発想で日常生活世界を論じ、多元的現実の構成や「いま、ここ」という私たちの他者理解の原点の意義を論じたA・シュッツが現代に生きていれば、驚愕きょうがくしたのではないだろうか。

私たちが具体的な身体を備え、もつとも意味が満ちたかたちとして他者と出会う空間としての「いま、ここ」。この空間は、私たちの至上の現実である日常生活空間にとつて原点であり、「いま、ここ」で私が現在という時間を生きており、他者との充実した意味に満ちた出会いが可能だからこそ、私は目の前の他者とながることもできるし、歴史的な過去を生きていた他者を理解し、直接見渡すことができない地平のかなたにある同時代の人びとのことを空想し、想像することもできるのだ。

その意味で、「いま、ここ」に直接的に現前する空間は、思いつき優先的で特権的な意義に満ちた空間のはずだ。

しかし、スマホというツールができたいま、「いま、ここ」がもつ意味は確実に変容している。鈴木によれば、私たちの現実にあいてしまった多くの孔を通して流入し、流出していく意味の濁流のなかで、「いま、ここ」がもつ **D** が喪失されているのである。多孔化した現実を私たちが生きてしまっているという鈴木^(注)の分析は、とても説得的で納得がいくものだ。これまでのネット社会に関する議論や、リアルとヴァーチャルの関係性を論じたものより、はるかに意義深いと思う。

(好井裕明『違和感から始まる社会学 日常性のフィールドワークへの招待』による。出題の都合上、一部中略・改変した箇所がある)

(注) A・シュッツ——アルフレッド・シュッツ(1899～1959)。オーストリア生まれの哲学者、社会学者。

問一 傍線部(a)～(e)の片仮名を漢字にしなさい。

(配点10点)

- (a) ヒヤク (b) ヒツス (c) キエイ (d) テッテイ (e) タンタン

問二

空欄

A

・

B

・

C

に入る最も適当な言葉を、次の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を記入しなさい。ただし、同じ番号は一度しか選べない。

(配点6点)

- ① ところで ② あるいは ③ しかし ④ もちろん
⑤ それでも ⑥ たとえば ⑦ すると ⑧ したがって

問三

傍線部(1)「現実空間の多孔化」とあるが、本文中の波線部(ア)～(オ)のうち、その成立に関わる条件として適当でないものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① (ア) ウェブ上のリアリティ
② (イ) リアルとヴァーチャルという区別
③ (ウ) 社会の情報化
④ (エ) スマホがある日常
⑤ (オ) ネット社会

問四

傍線部②「彼らは意味を書きかえた瞬間、その世界で生きている」とあるが、その具体的な説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① 乗客たちは、ネット上の世界に没頭していても、電車が到着し、車内に入って自分の場所を決めた瞬間から、乗客と
いう現実に戻されるといふこと。
- ② 乗客たちはスマホに集中しながらも、身体というアンテナを働かせることで、自らが生きる空間を車内からネット上
の多様な現実へと移行させているといふこと。
- ③ 乗客たちはスマホから得た情報により、実際に身を置く車内空間とは異なるネット上の現実につながり、各自がそれ
ぞれ多様な現実を構築しているといふこと。
- ④ 乗客はスマホから情報を得ることで、実際に身を置く車内空間とは別のネット上の多様な現実に出会うことで、自分
が生きる意味を模索しているといふこと。
- ⑤ 乗客はスマホから得る情報により、車内空間を共有する他の人びとの存在を自らの意識から排除し、それぞれ自分の
内面に独自の世界を描いているといふこと。

問五

傍線部③「リアルとヴァーチャルという二分法的な考えで、ネット上の現実^に幽閉されていく人びとのリアリティを解説し、批判してきた」とあるが、ここでの「リアルとヴァーチャルという二分法的な考え」の説明として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① 人間にとって、生身の心身から生まれる物理的な現実が真実のものであり、それ以外の現実^は存在しないという考え。
- ② 物理的に形あるものがこの世に実体として存在するものであり、人の脳内にあるものは実体をもたないという考え。
- ③ 人それぞれに備わる生身の身体や感情にもとづく物理的な現実を、他の現実から弁別するのは無意味だとする考え。
- ④ 生身の心身がつくる物理的な現実こそ、人間にとって意味に満ちたものであり、他の現実^に勝^{まさ}っているという考え。
- ⑤ 人間にとっての現実^は、生身の身体や感情がつくる現実とネット上の現実が、対等に成立しているという考え。

問六

傍線部④「ラディカル」の反対の意味を持つ語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点2点)

- ① 究極的
- ② 学術的
- ③ 実験的
- ④ 守旧的
- ⑤ 急進的

問七

傍線部⑤「いま、ここ」とあるが、A・シュッツのいう「いま、ここ」とは、どのような場か、六〇字以内で説明しなさい(句読点を含む)。

(配点10点)

問八 空欄

D

に入る最も適当な言葉を、本文中から三字で抜き出しなさい。

(配点3点)

問九

本文の内容と一致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選び、その番号を記入しなさい。

(配点5点)

- ① スマホなどの情報ツールの利便性により、人びとの日常生活における現実のあり方そのものが変化した。
- ② 社会の情報化は、人びとがどのように他者と出会い、つながるかという方法に対しても影響を与えたといえる。
- ③ 現代では、物理的、身体的な現実空間とネット上の現実空間との間に差異はなく、等しい価値をもつものである。
- ④ 人びとはスマホの情報により、ネット上の現実世界で多様な他者と出会い、多様な生き方を認めるようになった。
- ⑤ いまや人びとにとっての現実空間とは、物理的な身体が存在する場所に限定されるものではなくなった。